山岳重畳の地 椎葉 十根川集落



もう一つの正倉院 西の正倉院



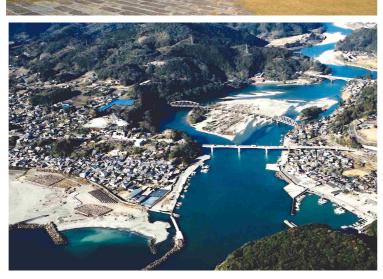
文豪を育んだ家 東郷 若山牧水生家

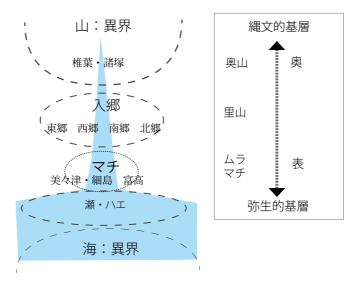


市民協働の木造駅舎 日向市駅 入郷の玄関

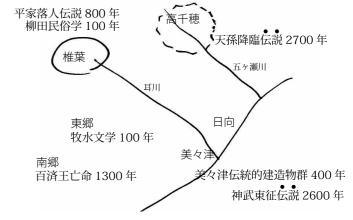


和船と共に繁栄した湊町 耳川河口 美々津





□耳川流域の空間模式図:日向はマチであり、入郷地区は里山にあたる。諸塚 椎葉は人里離れた山であり、日常では人の出入りがなく狩猟民や焼畑民などの 「山の民」が住む異界であった。縄文的な基層と弥生的な基層が耳川の上流下流 で拮抗していたことになる



□耳川流域の事象模式図:最遠の地に流れる 悠久の時

□日本のかつての秘境:昭和30年代までの 日本には5つの秘境と呼ばれる地があった。 本街道から急峻な峠を越えた多くの地で平家 落人伝説が伝えられている。交通の整備で「秘 境」は姿を消していったが「椎葉」は時間距 離にして最遠の地の一つである。

## 日向の空間と時間

#### □日向の空間

耳川は九州脊梁山地に源を持ち、椎葉村、諸塚村、美郷町、日向 市を流れ同市の美々津を河口とする流程100㎞あまり、流域面積 880平方㎞の大河である。耳川流域は険しい山で囲われており、そ れが生活空間の境界を成し、川による往来をベースとした経済的に 独立した一つの文化圏を構築してきた。

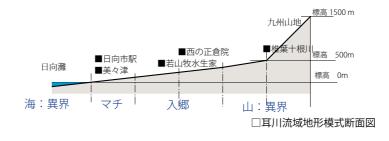
ここでは物理的な広さとしての空間に言及するのではなく、文化 によって条件づけられる空間に言及し、周知させるものである。日 本の典型的な村落の構成は耕地に点在する農家や街道に並ぶ町家で ある。それに距離を置き、山ふところに抱かれて寺があり、さらに、 一番離れたところ、山の頂に神社がある。奥へ行けば行くほど日常 性は薄れ、空間の聖性が増すのである。これは、日本人の意識の中 に普遍的にある「奥」を尊ぶ思想が形になったものである。

耳川流域圏にあてはめれば、奥日向とか日向の奥座敷という表現 を当てることができ、流域の人々はその奥をある種の異界として大 事にしてきた。耳川流域圏を一つの共同体に見立てると、人口が多 い下流域の日向市が中心を成し、下流域から上流域へ物理的な平野 空間の広がりと重ね合うように、文化の多様性の度合いも上流域に 来るとシンプルになるということが言える。

生産・消費という面からは上流域の素材供給、下流域の加工品の 供給という図式は今も変わっていない。

建築空間の形式においても、商家、農村、山村と洗練されたもの から初元的なものへと遡ることが出来る。集落の形式は典型的な町 家群から、散居村、里山に沿うような農家、最上流域に至っては等 高線に沿うように石垣で敷地をつくった独特な景観をつくる集落な ど、多様な住居形式を持つ流域である。

耳川流域は川を媒介にした上流域と下流域の典型的な関係が現在 もなお、生きた関係をつくる数少ない地域であり、この流域独自の 文化をかたちつくっている。



## □日向の時間

耳川流域ほど伝説や記録に残る長きにわたる人間の活動の歴史を 持ったところはない。遠くは神武東征の出発の地として伝えられ ている美々津、また、8世紀の百済王族の亡命王族伝説のある南郷、 12世紀の平家落人と源氏追討軍の物語のある椎葉、16世紀の伊東 氏と島津氏による九州の覇権を争った場である耳川の河口、江戸 期、交易の集積地として栄えた美々津港、そして、20世紀初頭に は柳田國男が椎葉を訪れ、日本民俗学の源である「後狩詞記」を 著した。

川の流れとは逆に、川を遡るように起きる事象。幼から老へ、上 流から下流への流れにたとえられる不可逆的な人生の時間。日本 人の時間の概念は神話に見られる混沌の世界から生まれた大地の ように、「始め無き終わりのない時間」である。川の流域にて繰り 返して起こる生活のサイクル、農耕民族の生活のサイクルである 収穫と再生、仏教の輪廻転生と結びついた繰り返す時間。耳川流 域で語り続けられている事象にこれらの三つの時間の類型を見る ことが出来る。

#### 日 向 : 人 建築

1885/1928 若山牧水 1875/1962 柳田國男 廻船問屋 河内屋

1578 大友・島津、耳川の戦い 1342 妙国寺

12C 後半 /13C 前半 那須大八郎 927美弥(美々津)駅の記載 856 日向国国分寺創建(西都) この頃 百済禎嘉王、福智王子日向入

696 国史に「日向國」が初登 660 白村江の戦い

BC6~5C?神武天皇

東郷坪谷に若山牧水生家(幕末) 椎葉/後狩詞記 1909 美々津伝建地区/河内屋 1855 築 美々津/庭園/県名勝 160中頃

ルイス・フロイスの記録に立磐神社の名 細島/庭園/国名勝 創建時 or1756 本堂建立時 椎葉/鶴富屋敷 (現建物 19世紀初頭築 ひえつき節

奈良/正倉院 8C 中頃 (南郷/西の正倉院(1996築) 南郷/神門神社8C前半創建 (現建物 1661 築、重文)

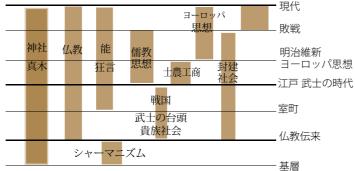
伊勢ヶ浜大御神社 創建不明 (現建物 1938 築、重文)

美々津/東征



## □朝霧に煙る八村杉(椎葉村)

# 木の文化



□時代レイヤー(層)と時代精神の模式図:現代までに文化的に大きな変革を もたらした時代を、八百万に神が存在した基層、仏教伝来、室町期の文化形成、 江戸期の儒教に裏付けられた封建社会、ヨーロッパ文化をどん欲に吸収した 明治期、価値観が大きく変わった戦後、そして現代からなる7つの層に分類 を試みた。現代に顔を出さずにレイヤーの途中で時代の波にかき消されたも のも多くある。古い時代から現代までいくつものレイヤーを突き抜けて顔を 出しているものは宗教であり、社稷を支える精神的な強さを持っているもの である。その精神を納める箱が神社や寺院である。そして、その箱は、多く の場合は「真木」でつくられているのである。

## 木造建築の文化としての杉

#### □日本文化のなかの杉

日本の国土の70%は森林であり、日本人の生活の中には物理的 にも、精神的にも「木」が大きく関わってきた。「木」は万葉の時 代から和歌の題材としても取り上げられ、百人一首にも以下のよう な著名な和歌を見ることができる。

村雨の露もまだひぬ真木の葉の 霧たちのぼる秋の夕暮れ 寂蓮 激しい雨の降った後、杉の葉から煙る水蒸気が容易に目に浮かぶ光 景である。この「まき」は「真木」であり、「真」は美称の接頭語。 美しい木を総称して「真木」と言い、 槍、杉、槙などがあてはまる。 すっと、天に延びた立ち姿は昔から美しいとされていた。

杉の直接の語源としては、天に向かってすくすくと生える木なの で『スギ 直木』と言われる。ちなみに、檜は『火の木』で火をお こすのに使ったとも、また、「ひ」は『良い』という意味があるた めとも言われる。

歴史的建造物が多く檜を用られている理由として、檜は均一で杉 に比べると目が通っていて加工しやすかったことがあげられる。大 型のノコである大鋸が用いられるのは室町期以降である。それ以前 は工具の関係で割りやすいこと、削りやすいことが良材とされたの である。古代では生産や施工上の理由、言わば現場の都合で檜の方 に軍配が挙ったともいえる。

#### □夜神楽と杉

日向の夜神楽に神が杉の木を伝わって地上に降り立つ場面があ る。天孫降臨で重要な役割を演ずるタカミムスビは別名を「高木神」 と呼ばれ、本来は高木の神格化されたものを指したと考えられてい る。この名が示す通り、聖なるものが木を伝わって降りてくること を象徴的に示している。これは海の彼方から神がやってくるという 水平型の神話の分類に対して、垂直型の神話と言われる分類で、北 方アルタイ系の神話に共通のものである。伝わっておりてくる「杉」 という物にこの地のローカリティを感じとることができる。





#### □文化の基層について

日本文化の主旋律は圧倒的に大陸から来たものである。それが時代 とともに在来の日本のものと混ぜこぜになった雑種文化である。現代 に顔を出している様々なものは過去のどこかに起源を持っている。

どんなにモダンな建物でも杉 (真木) が景色として入ることで「和 風」「日本的」と感じられる。これは杉(真木)が時代の深いとこ ろから、形態的にも、性能的にも優れた素材としてこの國の人に愛 されていたからに違いない。基層から幾重にも重ねられた時代とい うレイヤーを突き破る力を持っていたからである。潜っていたもの が顔を出すのではなく、時代を突き抜けて現代に顔を出しているの である。いわば、強い力を秘めた素材であると言える。

日本文化は何かと問われれば、モノではなく精神ということにな るであろう。杉はその精神をイメージさせるひとつのツールである ことには間違いない。学名 (Cryptomeiria Japonica) が示す通り、 日本にしか生息しない杉は美しいもの、尊いものであり、固有のも のである。再生産可能な素材として、日本の温帯モンスーンという 気候にも助けられ、昔から継続的にあり続けることができたことも 幸いした。

杉という旋律は、ある時は表舞台にあり、ある時は底の方で執拗 に響いている。丸山真男は「日本的なるものの古層」を音楽にたとえ、 「執拗に繰り返される低音」(「バッソ オスティナート」執拗低音) と言っている。それは低音部に一定の旋律を持ったフレーズが執拗

に登場し、上中音部と一緒 に響き、一つの音型を持つ けれど、必ずしも主旋律で はないものをさしている。 主旋律は大陸やヨーロッパ から来たものだ。執拗重奏 低音をモノに例えると、杉 (真木) はその一つであると 言える。そして、もとをた だせば、そのモノを育んだ 「温帯モンスーン気候」とい う環境が私たちの文化の基 層に大きく関わっているの である。



## 木造建造物と森林資源及び地域資源との連携による産業観光等形成事業の趣旨(平成22年度)

日本一のスギ生産地である宮崎県。その中心となっているのが、 県北の日向(ひゅうが)市を中心とする地域(日向・入郷 圏域)である。本圏の母なる耳川は、椎葉村に源を発し、諸塚村、美郷町を経て日向市美々津で日向灘へと注ぐ。この地域の人々 は、古くから耳川の水運を利用し、木材を中心とした物資を運んできたことで深く結び付いている。また、この地域には椎葉村・ 十根川と日向市・美々津という二つの伝統的建造物群保存地区があり、木造建築を通して山の暮らしと港町の暮らしを体感 できるほか、古来の工法を忠実に再現した西の正倉院や最新工法を採用した日向市駅など、全国に知られた木造建築の歴史 を体感できる建造物が点在している。

この事業では、耳川の流域で暮らす人々の結び付きについて森林資源を介して解き明かし、流域の著名な木造建造物とと もに全国へ紹介することにより、日向・入郷圏域(ひむか:宮崎県北)の交流人口を増やそうとするものである。

日向商工会議所

## □木造建築物は地域活性化の原資

本事業の目的は「観光と木造建築」という切り口で地域に活性 化をもたらすことにある。観光客は地域のお客様であるという視 点で、地域総ぐるみでお迎えするという姿勢が観光客の共感を呼 び、リピーターをつくる要因となる。そこで、地域を熟知した高 齢者の存在は大きく、観光客との語らいで高齢者自身も生き生き と健康であることが出来、地域の活性化につながることになる。 そのためには地域住民が地域の文化を周知し、その文化を観光資源 として認識することが大切である。

建築物はその地の文化の形象化したものとしてわかりやすい対象 である。教育機関に調査や参加を求め、学生諸君が伝統的建物や 先端的建物を訪れ、授業実習として生きた素材に触れ、専門教育 の場としての活用してもらうこと、美術館や記念館などの地域の 拠点文化施設とのタイアップで専門知識を活用すること、などが 活性化につながる有効な手段である。



□滔々と流れる耳川の風景

# しかし、主体はあくまで地域住民 である。例えば、地域住民が伝統的

#### □プロジェクトの鍵になる6つのキーワード

ベテラン職人

産業

にぎわい

まちづくり

Living Heritage

生きている遺産

町の伝建地区

□無垢「ムク」の文化を目指して

このプロジェクトは木造建築を通して観光のニーズを広げることだ

けではなく、他分野を広く巻き込み、裾野をひろげ、しっかりとし

た中身のある「**ムク**のもの」をつくることが真の目的である。その

ために、木造建築、観光の他に文化、森、健康、まちづくりという

6つのキーワードを抽出した。今後はこれらの言葉に関連する諸官

庁、教育機関、文化施設、市民団体、特に林業・建築諸団体、民間ツー

Living Heritage

牛きている遺産

山村の伝建地区

山菜、獣肉

ムクのもの

高齢者の出番

木造建築

2012 1 (2)

おみやげ生活

リズムなどとの連携が重要であり、成功の大きな鍵となる。

もてなし

おみやげ

建物で「木造空間浴」をして、伝統 の知恵や技術を学び取り、知的シャ ワーを浴びる。そして、住民の文化 度がアップすれば、だれもが観光ガ イドとなることができる。地域の観 光客ともつながり、活性化の原資と なるであろう。

#### □宮崎県:耳川流域の代表的な木造建築物

本事業は耳川流域の地域地域で保存状態のよい木造建築をその地 域の文化とあわせて紹介するものである。そのうち、椎葉・十根 川集落、南郷・西の正倉院、東郷・若山牧水生家、日向・美々津 集落、日向市駅の5つを特に選び、パンフレットをつくり紹介す るが、耳川流域は他にも多くの価値ある木造建築がある。大御神

社(日向)、神門神社(南郷)、高鍋 屋旅館(細島)、鶴富屋敷(椎葉)、 建築物ではないが FSC の森(諸塚) の5点を一見の価値のあるものとし て合わせて紹介しておく。

入郷:旧南郷村、東郷町、西郷村、北郷村の地域 を総称して言う。現在は旧南郷村、西郷村、北郷 村が合併して美郷町となり、東郷町は日向市と合

プロジェクト」の一環でつくられたものである。

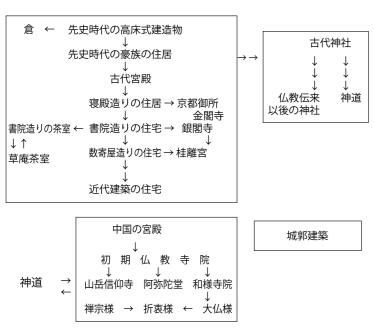




© 日向商工会議所 制作:川村宣元建築設計事務所

□日向耳川流域の建築物の分布

■このパンフレットは日本商工会議所の補助事業「地域資源∞全国展開プロジェクト」で、日向商工会議所が推進する「木造建造物産業観光等



□伝統建築の系譜、多様性について:歴史的由来と大陸からの影響に基づき、いくつかの系統に分けることができる。大きくは社寺、城郭系列、住宅系列、構法が他とは違う校倉造りの系統がある。

#### □寺社建築

社寺建築、この2つの建築上の区別ははっきりいえない。寺といいながら、かつて神社に使われていたというものもあり、神社と寺を建築の形の上で区別することは難しい。形の上では、ひとまとめにしたほうがわかりやすい。

#### □城郭建築

城は明らかに社寺建築とは系統が違う。これを外国人が見ると、すべてが鉄筋コンクリート造と見る。特に最初に大阪城を見た人は姫路城を見ても、もちろん鉄筋コンクリート造と信じる。それぐらいに、他の木造建築とはかけ離れたような格好をしている。したがって、「伝統建築は」といったときに、城と社寺仏閣とは区別する。

#### 一町屋と民家

町屋の多くは城下町の狭い町民居住域に、決められた間口と長い奥行きを持つ敷地に建てられた。隣家と肩を寄せ合い密集した居住域を形成し、独特な景観をつくった。一方、地方で発達した伝統的な民家は、村の庄屋の豪邸から草葺きの農家を含む。地方によって意匠が違い建てられた年代によっても異なった形式を持つ。全国で町屋と民家の町並み、あわせて86箇所が現在、重要伝統的建造物群保存地区として選定されている。 □校倉造り

最後の分類に校倉造りがある。校倉の三角形断面は日本にしかないもので世界的に見て特殊である。日本にしかないとすれば、どうして日本で三角形になったのか、それはこれからの研究課題である。

## 日向と伝統建築

## □木造建築の理解のために

日本の長い歴史の中で数多くの建築様式が起こり、変遷してきた。その基層に流れる精神は「人と自然の対等なつながり」にあると加藤周一は述べている。とりわけ、建築素材である木とのつながりは深い。またその精神が素材や技術、建築様式に大きく関与してきた。日本社会や文化と深く関わりながら、日本建築は「自制」と「横溢」、そして「緻密」という背反する様式を生んだ。

## 1) 自然素材

伝統的な建築の特徴はその置かれた時代背景から、当然、木材などの自然素材を多く使うことである。木は湿気を吸収、放出して環境になじむことができる。きちんとしたメンテナンスのもとであれば、木はそれ自身の年輪と同じだけの歳月を建築の素材として役割を果たすと言われている。「土」は壁や土間になり、焼きしめることで瓦となる。石灰や貝殻は「漆喰」として壁を美しく仕上げる。さらに、礎石や敷石、石垣や階段として「石」を用いる。

自然素材を用いることで左右非対称となり、直線やデザインの 簡潔さは控えめな表現となる。それらが木造建築の大きな特徴と なっている。大陸から移入されたシンメトリーの様式は、日本の 担い手によって、変化し、独自のスタイルにつくりあげられた。

#### 2) 自制と横溢

日本建築には、先に述べた「デザインの簡潔さ、控えめな表現」と相反する絢爛豪華な色彩や精緻な造りへの嗜好がある。神社仏閣や日光東照宮の朱塗りの柱と漆喰の白い壁の鮮やかなコントラスト、シンメトリーや曲線の採用、精巧な彫り物による装飾など、あふれ出る表現が一方にある。大陸から持ち込まれた形式が時代や地域、建物の用途によって少しづつ日本化されながらも継承した例である。

#### 3) 緻密さ

ディテールに対するこだわりは時代や建物の用途にかかわらずー 貫して日本建築にあるものである。深い軒先に用いられる三手先や

六手先の木組み、斗栱、釘を使 わず木同士を接合する仕口の技 術など、これらが幾重にも重ね られ、リズムを持った統一感や 安心感を創り出している。



おががいせんで 一追掛大栓継:最強の継ぎ手(仕口)と言 われる。梁などの主要構造部で応力がかか る部位に用いられる

## □伝統を消さない、ものづくりへの視点

建築の生産システムが大きく変わり、大なり小なり、現場は組立工場になっている。もともと建設会社は多くの下請けを束ねひとつものをまとめあげていくので商社的要素を持っているが、最近、その要素が顕著だ。システムが変われば人も変わる。極論だが、現場作業が単純になれば人は工夫をしなくなり、ものづくりにこだわりを持った人が少なくなるのは当然である。

例えば、レールを使った古い駅舎、細い部材でラチスを組んで 出来た鉄橋など、鉄が貴重な時代、出来るだけ少ない重量で架構 を組上げることが至上命令であった。鉄の値段に比べると架構組 み立ての人件費などは遥かに少ないものであったからである。設 計者も製作者も多いに工夫をした。しかし、世の中に鉄が徐々に 出回ってくると、鉄と手間の値段が逆転した。ラチス梁は H 鋼梁 になり、パイプになった。構造の美しさが消えてしまったのだ。

鉄ばかりではなく木造の世界でも同じようなことが起っている。 伝統的仕口を用いた木造軸組工法がプレカット工法に取って代わり、さらに、阪神大震災以降、様々な風評を受け木造軸組工法が打撃を受けシェアを減らした。左官工事は湿式工法ため養生に手間がかかる。工事現場では、工程管理上きらわれ、隅に追いやられている。

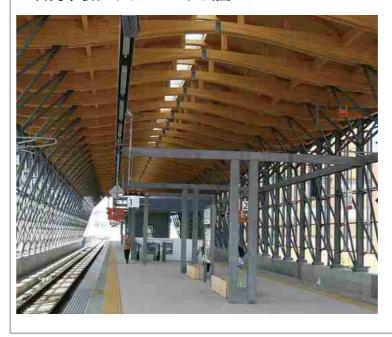
これは「手間のかかるもの=コストがかかる」という図式であり、 当然のことながら経済の原則上は退けられ、手間のかかるものは 大勢として、消え行くものであろう。「もの」と「人」、すなわち 材料と職人の対峙であり、この行く末を憂うるものである。

それではこれに対してどう対処すべきか?いや、対処などというおこがましいことではなく、どういう心構えでいるべきかである。

昨今のように世の中の経済状況が大きく変わる時、建設のシステムもまたさらに大きく変わらざるを得ないし、時代の大きな流れなのでやむを得ないことである。しかし、百年、千年と培って来た職人の技術が博物館に入ってしまうことがあってはならない。職人の技術は「もの」に蓄積されるものではなく「人」に蓄積されるものであるから、仕事がなくては継続出来ない。木や左官など自然素材が見直されており、追い風になっていることも事実であるが、伝統だけではやっていけないのも事実である。

これを機会に多くの方々が伝統技術を見直し、木造軸組工法を正 しく理解をしていただくことを望むものである。

## □日向市駅、キャノピー、公園ステージ

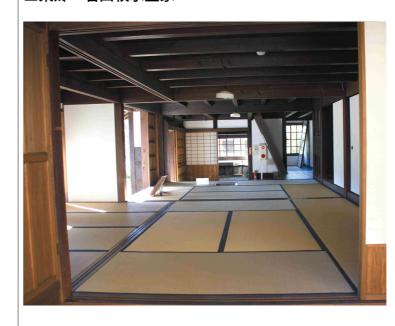


日向市駅は鉄道を高架化する連続立体交差事業の一環として誕生した。平行して進行しつつある中心市街地の区画整理事業、特定商業集積事業の中心的建物でもある。従って、単体としての駅をつくるのではなく、駅東西に付設する大きなキャノピー、駅前広場と一体に高いシンボル性とポテンシャルを持った施設であることが求められた。

駅事業は日向市駅を中心にした中心市街地を再生するべく、平成9年から始められた。構想・計画そして事業化に至るまで、行政(宮崎県、日向市)、市民(日向市、後背圏域である入郷地区)、鉄道事業者、この事業を支援する学識経験者、専門家による委員会で常に「市民に開かれた」状態で、言わば、公民協働体制による議論の積み重ねで進められた。平成21年には東西駅前広場、交流広場が完成し、平成22年には、公園ステージが完成し、足掛け14年に亘る駅周辺事業は完成した。

駅舎建築に贈られる国際的なブルネル賞を日本で初めて受賞。 建設業界賞など数々の栄誉ある賞を受賞している。

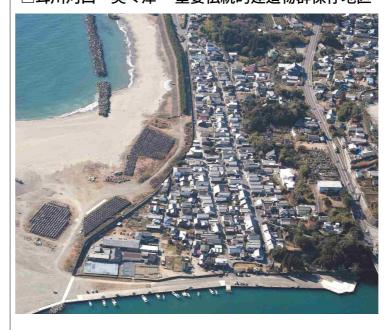
## □東郷 若山牧水生家



牧水生家は、歌人若山牧水が生まれた家で、江戸時代後期に牧水の祖父である若山健海によって建てられた。健海は、現在の埼玉県所沢市に生まれ、15歳の頃から江戸・福岡・長崎で漢学・蘭学・西洋医術などを学んでいる。1836(天保7)年、25歳のときに坪谷に移り住んで開業し、1845(弘化2)年に診療所をかねた2階建ての家を建てている。医院としての機能を持たせるために、当時としては大きな構えの家を作る必要があり、石垣に囲まれた敷地には、井戸や馬小屋をかねた納屋など当時としては立派な家構えだったといえよう。主屋や馬屋は町家と山村住居の特徴を併せて持った構成をしている。

牧水(本名:繁)はこの家の東にある縁側で誕生し、多感な幼年期をこの山紫水明の地、坪谷で過ごしている。家族や地域の人々によって愛情たっぷりに育てられることで、その短歌作品に大きな影響を受けている。雅号の牧水は、母の名「牧」と坪谷川の流れを合わせたものであるという。

## □耳川河□ 美々津 重要伝統的建造物群保存地区



美々津は、古い歴史をもつ港町で、中世末期には集落が営まれていたと考えられている。美々津港は、今でこそ、小さな漁港であるが、かつては懐深い天然の良港として大いに賑わっていた。特に江戸時代は、高鍋の蚊口港とともに高鍋藩の商業港として重要視され、藩主秋月氏も、この港を参勤交代に利用していた。なかでも保存地区に選定された上町、中町、下町からなる立縫地区は、耳川河口に築かれた港の隣接地として、独自の発展をとげたところで、江戸時代から明治時代の建物が数多く残っている。また港から南に延びる3本の主道路や、それらと直交するツキヌケ(火防地)は、江戸時代に設定されたものと言われており、旧い敷地割や石畳などとともに、美々津の歴史的景観を構成する重要な要素となっている。

なお保存地区は、7.2 ヘクタールの面積を有し、その中に約100棟の伝統的建造物と、土塀や石垣、樹林帯などを含む40件の環境物件が所在しており、「周辺の豊かな自然環境とともに歴史的な港町として価値が高い」と評価されている。

## □木造空間浴の体験のすすめ

伝統的な木造建築は多くの木材を使用し、継ぎ、組まれ、すばらしい構造の造形美 を見せている。その造形美は、目に見えない技術や見えないしきたりによって構成さ れている。木造の技術は、釘を使わないで二本の木材を継ぐことや、木材という自然 素材を知り尽くした上で強度や耐久性そして美観をいかに高めるかという命題のため に、建築物の直接の表現になったり、陰の力となっている。

他方、木造建築は様々な部分が見えない「しきたり」で出来ている。それは「なぜ?」 と私たちの脳を刺激する。家のしくみの理論、風水や家相、先人が築いたたくさんの 「きまりごと」がある。たとえば、床の間の方角、神棚、仏壇の方角、ハレとケの時 の骨の敷き方、天井の棹縁の方向、縁側や廊下の板目の方向、建具の前後の並びなど、 数え上げればきりがない。自然との対峙から生まれるその土地独特の造形もまた空間 を感じることが出来る。

耳川流域を訪れる方には、建物にまつわる独特の風土を感じとっていただくととも に、木造建築に先人の知恵を発見していただきたい。

木造空間浴とは、強力な「知的シャワー」を感じ取ることである。

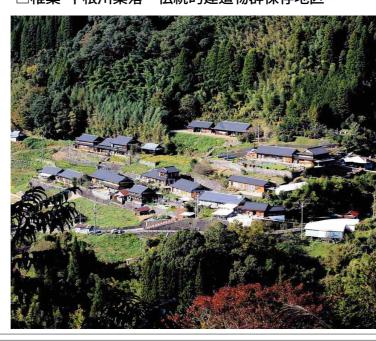
椎葉の民家は「椎葉型」といわれ、部屋が並ぶ一列平面形式に

特徴がある。十根川の民家もこの椎葉型の特徴をそのまま残し、

これらの主屋と付属建物である馬屋、倉、神社建築、石造工作物、



# □椎葉 十根川集落 伝統的建造物群保存地区



石垣によって伝統的建造物群が構成されている。平面形式の民家 は、部屋間の板戸を取り除くことによって冠婚葬祭や神楽宿とし て広く機能的に使うことができる。十根川集落は緩やかな斜面を 造成して敷地にしており、等高線に沿って敷地が長細い。奥行を 大きくするには石垣を高く積むことによって確保できるが限界が あり、よって敷地の制約から一列型住居が成立したと考えられる。 「倉」が住宅地から隔たった耕作地に立地することは、火災の延焼 防止の上で有効であり、貴重な食糧等の保護策として特筆すべき ことである。景観的特徴である石垣は、集落の全域にわたって分 布している。灰石を割り、乱積みを主体とし、美しい反りを持つ ものも多い。傾斜住区であるため、里道から屋敷地への導入に石 段を多く取り入れており、石垣と共にこの地域の生活から生まれ た固有の空間的な仕掛けとして、特徴的な景観を構成している。 地区全体がこうした石垣と石段によって成り立ち、その集積に価 値を見ることができる。

美郷町南郷区に伝わる百済伝説によると、白村江の戦いで敗れた 「百済」王族が日本に亡命した後、南郷に移り住み、その後、都か ら追討軍が送られ、戦火の後、王族一行は最後を遂げた。王族の遺 品「唐花六花鏡」は学術的に貴重なもので17面がこの地に残って いる。この文化財を後世に伝えるために宮内庁、奈良国立文化財研 究所の支援、建設大臣の特別許可により、門外不出とされていた正 倉院原図を元に樹齢 400 年から 500 年の木曾天然檜により忠実に 再建した。規模、造営材とも奈良正倉院と寸分の違いも無い「西の 正倉院 | には、故郷を追われた百済王族達の郷愁を 1300 年の時空 を超え今に伝える平成の文化財といえる。

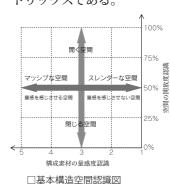
「西の正倉院」は奈良正倉院の御物と同一品を含む、貴重な文化 財が存在することから計画された博物館である。この様に西の正倉 院では、今まで非公開とされている奈良正倉院内部も忠実に再現し、 百済王が祭られている神門神社所有の宝物や伝説を裏付ける師走祭 りの紹介をしている。中でも百済王族の遺品と云われる 24 面の銅 鏡の中には奈良東大寺大仏殿の台座と同一品である「唐花六花鏡」 をはじめ学術的にも貴重な宝物が展示されている。

## □南郷 西の正倉院

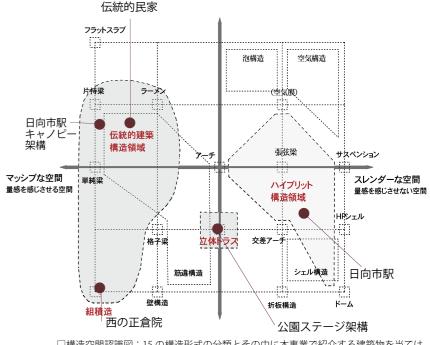


## □木造建築の基本構造と空間認識について

空間を認識する言葉として、「大きい、小さい、広い、狭 い、オープン、クローズ、量感、美しい」といった形容が ある。一方が空間のオープン率を表す開放感であり、他方 が空間を構成する構造素材の存在感を表す「量感」である。 この二つの空間を認識する言葉として組み合わせることに より、空間構造である「基本構造」を視覚的に認識するマ トリックスである。



構造的空間認識は「空間の 開放感」と「素材の量感」 を重ね合わせると左図のよ うに表すことができる。左 図はこの認識図の中に空間 構造の15の基本形式を位 置付け、その相互の関係を 一目で認識することができ るようにしたものである。



□構造空間認識図:15の構造形式の分類とその中に本事業で紹介する建築物を当ては めた(分類は「木による空間構造のアプローチ」(今川英憲著)による)

## 日向の建築構造の形式

## □日向耳川流域の建築物の空間的、構造的特質

日向耳川流域に分布する木造建築の特徴にあわせて構造空間認 識図にその特徴をあてはめたものである。

この地区で特筆すべきは、伝統的な構造の分野の建築と、その 対極にあるハイブリット構造の「日向市駅」の存在である。

伝統的建築構造領域の建築として、校倉造りの「西の正倉院」、 山間傾斜地を石垣と共に巧みに生かした景観をつくる椎葉の「十 根川伝統的建築群」、山間部とは対照的な町家の景観をつくる「美々 津伝統的建築群」、そして、日向耳川流域にあってこの地の精神的 な支柱の一つであり、江戸後期の医家の特徴を持つ「若山牧水生家」 を抽出した。その他に特筆すべき建物として神社建築の本流であ る神明造りの大御神社、類例の少ない流造りの本殿・七間社流造 りの拝殿を持つ神門神社、細島地区の特異な存在である三階建て の木造建築である旧高鍋屋旅館を上げることが出来る。

伝統建築と対極にある集成材を用いたハイブリット構造の日向 市駅、並びに同キャノピー、公園ステージについて、建設経緯、構 造的特徴、生産技術の面から言及した。対極にある構造とは言え、 伝統的な仕口を構法のヒントにして、新しい技術に置き換えて建 設した。

□組積造の位置:西の正倉院:荷重(自重や地震力)を摩擦力に変 えて抵抗する構造。校倉造り、ログハウスなど。空間開放率が低く、 部材の量感度が大きい特異な点、第3象限左下に位置する。

□立体トラス構造:線部材を立体的に組上げた三角錐または四角錐 ユニットを平面的に連続配置でできあがる構造。空間開放率 25~ 50%、部材の量感度は中位であり、水平方向に広い床、屋根を計 画するときに効果的である。公園ステージの架構部は構造解析上は 立体的なフィーレンディール構造であるが、視覚的にとらえ、立体 トラス構造の分野に入れた。

□片持構造:重力を利用する斗 栱 構造と重力に抵抗する柱梁構造 がある。社寺や民家では伝統的に前者が用いられ、だんだんとせり 出していくことから「持ち送り構造」とも呼ばれている。深い軒に はこの構造が用いられいる。

□ラーメン構造:空間開放率50~70%、部材の量感度4の間に位 置する。ラーメン構造の量感度に巾があるのは部材が細いとスパンが 小さくなり、太いとその反対に広くなる構造で、空間計画において選 択の自由度が高い。清水寺の舞台を支える柱梁構造がわかりやすい。

□ハイブリッド構造:日向市駅、キャノピー、公園ステージ:ハイ ブリッド構造は空間開放率50%、部材の量感度2~3の間に位置 する構造で、空間を解放的にするとともに部材の量感度をあまり感 じさせない空間構造である。日向市駅、公園ステージは構成部材の 役割がはっきり分ける方式のT-Sハイブリッド構造(T:timber:木、S: steel:鉄)である。キャノピー:T-S ハイブリッド構造であるが桁 方向の鉄骨ラチス梁を集成材の梁が挟み込むような構成である。



を渡して軒を支える方式。 くわかる軒





直接外部に出し、そこに桁 であるが持ち送り構造がよ 雪やしみ込んだ雨の不均等荷重を支 で組まれた梁、梁は木を刻 ピンで接合。軒は持ち送り構造である。 えるために縦横、3段に組まれる梁 むこと無しに組まれている





□西の正倉院:梁間の梁を □食料倉(椎葉):シンプル □鶴富屋敷梁:茅葺き屋根にかかる □キャノピー:1m ピッチ □公園ステージ:柱脚固定の鉄骨パイプに木架構を